

令和元年度 第1回「教育長と語る会」

長崎県教育委員会では、毎年、教育改革などをはじめとした教育の課題について、学校で中心的に活躍している教職員が教育長と直接懇談して相互理解を深め、今後の教育活動に生かすことを目的に「教育長と語る会」を開催しています。

第1回目となる今回は、11月25日（月）にホテルセントヒル長崎にて、県内の公立高等学校から12名の先生方が参加し、「ふるさと教育の充実に向けて」をテーマに意見交換を行いました。

意見交換の様子 「ふるさと教育の充実に向けた提言」



参加された先生方には各校の生徒の実態をお話していただいた後、ふるさと教育の充実に向けた取組と成果について、ご説明いただきました。地元での行政や地域の方々との連携や地域の特産品を活用した商品開発、小学生との交流活動など、特色ある実践事例が紹介されました。それぞれの実践にかける先生方の熱い思いが込められており、教育長も参加者も熱心に耳を傾けていました。

【参加者の声】

- とにかく生徒を地域に出すことを心掛けた。市職員の協力体制も得られ、行政との連携が非常にスムーズなため、生徒も熱心に活動に取り組んだ。
- 高校生が地域の高齢者と一緒に遊具を作り、それを公園に設置したり、学校の近くにあるファミリーレストランに地域の特色を生かした、オリジナルのメニューを提案したり、地域に根差した活動ができています。
- 海外の高校生と交流したときに、「自分たちがいかに自分たちの地域のことを知らないか」ということに気づいた。地域のことを知るということは、やはり原点である。
- 「生徒にとってのいい授業は、地域の方々にとってもいい授業」と言える。学校がやっていることをオープンにし、小学校から高校までが一緒になって活性化していくことが大事。生徒・住民・行政が一体となって、教育に関するセッションなども実施している。
- 成果として、約80%の生徒が「ふるさとの良さを改めて知ることができた」「将来ふるさとの発展に貢献したいと思った」と答え、3年生の地元就職率が向上した。



池松教育長からあいさつ(抜粋)

高等学校の小規模化が進み、人間関係が限定的になることが心配です。世間には、「自分の考えとは違う人がいる」ということを肌身で感じてほしいのです。そのような意味において、探究型学習の時間を利用して、外に出ていくことをぜひやってほしいと思います。「自分で課題を立てて、実践をする」という学習が、コミュニケーション能力を育てることにもつながります。また、地域は自分を育ててくれた場所であり、自分のアイデンティティーの基礎とも言えるので、地域についての理解も深めてほしいと思います。そういう意味では、小中高における発達段階に応じたふるさと教育はとても大事で、高校では今後の将来展望を含めた実践も大事です。いろいろな人間と協働して仕事をやっていかななくてはならないグローバル社会を視野に入れて、これからの自分の生き方や自分の価値観、自分の軸を作ってもらいたいと思います。高校は大人が手を掛けられる最後の3年間です。高校が果たすべき地域活性化のための役割には大きいものがあります。ふるさと教育を高校で経験し、その結果として、県内で活躍する若者が増えていくことを願っています。今日は、本当にありがとうございました。



令和元年12月3日
長崎県教育委員会
教育長 池松 誠二